



「分析」と紡ぐ、私の歩み

熊本県立大学の白土英樹先生からバトンを受け取りました、中村学園大学の沖智之と申します。白土先生とは大学時代からのご縁があり、今回このような執筆の機会をいただけたことを、たいへん嬉しく光栄に思います。本エッセイでは、「分析」というキーワードを軸に、これまでの私の歩みを振り返ってみたいと思います。

私が日本分析化学会に入会したのは、九州大学農学部食糧化学工学科の食品分析学講座に所属していた大学院生の頃でした。学生時代には、日本分析化学会九州支部主催の分析化学講習会に実習補助として参加し、受講生への実技指導を担当していました。特に、ガスクロマトグラフへの試料の注入方法を説明したことをよく覚えています。その際、装置メーカーの方から技術的知見を丁寧な教えていただき、非常に勉強になったことを記憶しています。また、福岡市で開催された全国大会では、会場運営を担当し、学会の雰囲気やその役割を肌で感じる貴重な経験となりました。

大学院修士・博士課程を経て博士（農学）を取得後、2000年に九州農業試験場（現在の農業・食品産業技術総合研究機構〈農研機構〉九州沖縄農業研究センター）に、重点研究支援協力員という派遣職として約3年間勤務しました。配属先は、熊本市に隣接する合志市にある同センターの「共同利用研究棟」でした。この施設は、民間企業、大学、公設試験研究機関などの研究者が最新の分析機器を活用して研究が行える、オープンラボとして設けられたものでした。食品分析学講座出身という経緯から適任と判断されたのか、私はそこで分析機器の管理や技術指導を担当し、研究者と共同で研究を進める傍ら、機器利用のサポートにも従事しました。具体的には、分析条件の最適化、トラブル対応、機器の保守点検などを通じて、研究が円滑に進むように支援していました。

その後、農研機構で任期付研究員として採用され、5年間の任期雇用を経て、幸いにも常勤職に就くことができました。在職中は、主に九州・沖縄地域で栽培される暖地農作物の高付加価値化を目的に、農作物の機能性評価や機能性成分分析、評価法・分析法の妥当性確認などの業務に携わりました。他にもさまざまな業務に携わりましたが、なかでも分析と深くかかわったのは、汎用的な分析マニュアルの作成と、Y社の「機能性表示食品（事業者が科学的根拠を示すことで機能性を表示できる

制度）」の届出に採用された分析法の確立です。このマニュアルは、現在も一般社団法人食品需給研究センターのウェブサイト（「食品機能性評価マニュアル」で検索可能）で公開されており、広く活用されています。

2018年からは縁あって、中村学園大学栄養科学部に着任しました。思いがけないことに、過去に作成した分析マニュアルに関する問い合わせは現在も続いています。農研機構の所属を離れて久しいにもかかわらず、公設試験研究機関、企業、大学などの担当者から分析法に関する電話やメールでのお問い合わせをいただくことがあります。中には、Zoomを用いて分析法のトラブルシューティングを行う機会もありました。「分析」という共通言語が、場所や所属を越えて人をつなぐ力を持つことを実感しました。

現在は、管理栄養士養成課程において「食品加工」に関する講義や実習を担当しています。大学は私の学生時代とは大きく様変わりしており、「シラバス」や「3つのポリシー」など、当時は耳にしなかった用語が飛び交っていて、着任当初は戸惑いの連続でしたが、ようやく大学の仕組みにも慣れ、学生との距離感もつかめるようになってきました。日常的に分析装置を扱う機会は減りましたが、食品の特性や加工工程を学生に伝えるなかで、分析化学的な視点がいまなお大いに役立っています。

このエッセイの執筆を通じて、自身の歩みを「分析」という視点からあらためて見つめ直すことができました。当初は「分析」と少し距離ができたようにも思っていました。教育や実践の場において、実はずっと「分析」とつながり続けてきたことに気づかされました。最近では、学生の就職支援の一環で面談を行い、自己分析の支援をすることもあります。その際、「実は自分自身こそ、自己分析があまりできていなかったのでは」と気づかされ、思わず苦笑いすることもあります。

最後に、このバトン向西九州大学の安田みどり先生へお渡ししたいと思います。安田先生は、管理栄養士養成校において産学官連携を積極的に推進されるとともに、非常にユニークな研究に取り組まれている、私が深く尊敬する先生です。ご多忙のなか、快くご承諾いただきましたことに、心より感謝申し上げます。次回のエッセイを楽しみにしております。

〔中村学園大学 沖 智之〕